

時事問題を取り入れたリスニング学習の効果とその展望

—現代国際学部における Listening Comprehension 1/2 の実践例—

The Effectiveness and Prospects of Incorporating Current Topics into the Learning of Listening Skills:

A Practical Example of Listening Comprehension 1/2 in the School of Contemporary International Studies

吉見かおる

Kaoru YOSHIMI

1. はじめに

本稿は、名古屋外国語大学で実施されている全学共通英語基幹プログラム（CELP：Cross-departmental English Language Program）の一科目、Listening Comprehension 1/2の授業概要を報告するものである。受講対象学生は1年生であるため、基本的なリスニング力の養成が授業のコアとなるが、本稿では、時事問題を扱ったリスニングの授業例（現代国際学部対象）を紹介し、受講学生によるアンケート結果とその分析を踏まえ、多種多様な情報に溢れる現代の大学における英語リスニング学習の意義、またその展望を考察する。

2. Listening Comprehension 1/2の概要

筆者がこの科目を担当したのは2017年、2018年である。通年で実施されるこの必修科目の受講生は1年生の約35名であり、言語学習のクラスとしては比較的規模が大きい。

リスニングの基礎力を養うテキストとして、*Listening Steps*（金星堂、2017）を扱った。本教材は、日本人が苦手とする英語の音を発音学習を通じて体得し、段階的に聞き取る量を増やしながリスニング力を強化することを目的としている。教授用視聴覚資料のClass DVDにはネイティブ教員による発声

のデモンストレーションと日本人教員による丁寧な説明が収録されており、発声練習の導入を経てリスニング学習が始まるようにデザインされている。

「授業概要」、「目標達成のための授業方法」を以下のように設定した。

〈授業概要〉

英語学習者が苦手とする英語の音を発音学習を通じて習得し、徐々に聞き取る量を増やしながリスニング力を育成する。リスニング力は、スピーキング力、リーディング力、ライティング力の伸長にもつながる重要なスキルであるため、耳から入る学習の重要性を学ぶ。

〈目標達成のための授業方法〉

様々なシチュエーションで必要となる英単語、英語表現を扱ったテキスト *Listening Steps* に沿って学習を進める。まずは連語 (collocation) や成句・熟語 (phrase) を学び、語のつながりの聞き取りを強化する。その後、単文を使って実際に発音しながら学習し、音声を使ったディクテーションを行う。さらに、TOEIC Listening and Reading テスト形式問題 (Part 1: 写真描写問題、および Part 2: 応答問題) を解いて学習効果を確認する。各ユニットが終了するごとに小テスト (ディクテーション) を行う。また、随所に世界各国のニュースの聞き取りを行うレッスンを組み込み、英語を通じて現代の社会情勢を知る試みを実践し、それに対して自分の考えを整理する学習も行う。事前学習として日本語の新聞を毎日読むこと。

テキストを構成する全15 Unitでは、以下の発音ポイントを学習する。

- Unit 1 Travel [eɪ] 音の連結
- Unit 2 College Life ① [r] 弱形
- Unit 3 Shopping [ɪ] 強形
- Unit 4 College Life ② [ə] 弱化 (1)
- Unit 5 Hotel [æ] 弱化 (2) - 音の脱落

- Unit 6 Train [ʃ] r 音化
- Unit 7 Restaurant [f][v] 同じ音の連続
- Unit 8 College Life ③ [ʌ] port と sport
- Unit 9 Leisure [ɜː][ɜː] 強勢 (ストレス)
- Unit 10 Traffic [ʃ][dʒ] rain と train
- Unit 11 Business ① [ə][ð] 語頭と語末の /b//d//g/
- Unit 12 Clinic [ŋ] 語末の子音脱落と母音の長さ
- Unit 13 Business ② [i|i:] [o|u:] リズム
- Unit 14 News [oo][əo] イントネーション (1)
- Unit 15 Business ③ [ɪə][eə][ʊə] イントネーション (2)

内容は、日常生活や学生生活と関りのある扱いやすいものであるが、実際にリスニングを実践すると、学生たちの単純な単語や冠詞の聞き落としが目立つ傾向にあった。そのため、一期は確実なリスニング基礎力の養成を重視し、教授用CDを使って、最終的に学生がディクテーション演習で単文を確実に書き取れるようになるまで何度もリスニングを試みるようにした（多い時は同じ内容を4回繰り返す）。

一つのUnitを2週の授業でカバーするため、1期はUnit 1から7を、2期ではUnit 8から15を学習するスケジュールで進行した。また、各Unitは5つのStep要素から成り、以下はその構成概要である。

① Step 1 (Words)

- ・ 単語レベルの聞き取り
- ・ Pronunciation Tips では日本人が苦手とする英語の音を音声による解説で学習する (*Class DVD で確認)。
- ・ 後半のStepで扱う母音または子音を含む単語を取り上げ、発音や意味を確認することを目的とした導入部。

【テキストの例：Unit 1. Travel (p.11)】

〈Pronunciation Tips〉

▶[ei]は二重母音という一つの母音。日本語の「エイ」のように「エ」と「イ」という2つの母音が連結したわけではない。二重母音を発音する際は、最初の要素を長く強く、後ろの要素は短く弱く発音するのがポイント。[ei]の場合、[e]は日本語の「エ」よりも口を少し横に開けてはっきりと、[i]は「イ」より少しあいまいに発音すると効果的である。2つの要素がなめらかに移行するように発音すると一つの母音となる。

▶学習する単語：reservation, available, vacant, delay, destination (*CDを使用し、太文字箇所を確認)

② Step 2

(Collocations & Phrases)

- ・ Step 1で扱った単語を含む連語 (collocations) や成句・熟語 (phrases) を学び、語のつながりの聞き取りを強化する。
- ・ Sounds Changeでは音の連語など、音声以外の英語の音の特徴を学ぶ。

【テキストの例：Unit 1. Travel (p.12)】

〈Sound Change〉

▶リスニングの際に聞き取れない要因として挙げられるのが、2つあるいはそれ以上の単語がつながっている連語。例えば、think ofの場合、前の単語の最後の子音と後の単語の最初の母音がつながって発音される。つまり、「スイインク・オヴ」と2つに分かれず、thinkのkとofのoがつながって「スインゴウ」となる。このように音がつながる現象をリンキング (linking) といい、英語ではしばしば出てくる音の変化である。

▶学習する連語：take out, keep on, take off, check in, watch out (*CDを使用し、太文字箇所を確認)

③ Step 3 (Sentences)

- ・ Step 2の Sound Change で学んだ音の特徴を、単文を使って実際に発音しながら学習する。
- ・ ナチュラルスピードとゆっくりめのスピードの2種類音声を使ったディクテーションを行う (*CDを使用)。
- ・ その後、TOEIC (Listening and Reading) テスト形式の問題 (Part 1: 写真描写問題、Part 2: 応答問題) を解いて学習効果を確認する。

【テキストの例：Unit 1. Travel (p.13)】

▶学習する単文

- ・ We would like to check in.
- ・ Your flight number is AK1092.
- ・ Your seat is number fourteen A.
- ・ That's an aisle seat.
- ・ Are there any other seats available?

④ Step 4 (Conversation)

- ・ スクリプトを見ながら会話を聞いて、Sound Change で学んだ音の特徴を確認する。音声はナチュラルスピードとゆっくりめのスピードの2種類が用意されている (*CDを使用)。
- ・ 3名による会話のため、TOEIC (Listening and Reading) テストのPart 3形式 (会話問題) にも対応している。

【テキストの例：Unit 1. Travel (p.14)】

① John と ② Alice の空港の ③ チェックインカウンタースタッフとの会話文。Step 2の Sound Change で学習したリンキングを意識させた会話学習 (リンキング箇所は太文字になっている)。

⑤ Step 5 (Short Talk)

- ・ TOEIC (Listening and Reading) テストの Part 4 形式 (説明文問題) の説明文を聞いて、空所補充を行う。音声はナチュラルスピードとゆっくりめのスピードの2種類の設定 (*CDを使用)。
- ・ その後、説明文の続きを聞き、選択式の内容理解問題に答える。

【テキストの例：Unit 1. Travel (p.15)】

▶飛行機で流されるCAによるアナウンス内(*CDを使用)。

各Unitの習得状況を把握するため、教授用資料にある“Dictation Worksheet”を使用し、小テストを各週で行った(テキストの中から10の単文が出題され、5つは空所語句の書き込み、残りの5つは単文の書き取りから成る)。

3. 時事問題を取り入れる

上記はテキストベースで進めるリスニング基礎学習の概要である。それに加え、随所に世界各国のニュースを扱ったリスニング学習を組み込むようにした。それは、“Listening Comprehension”が本来意味するように、「リスニング」することを実際に「理解」し、その内容を思考し「読解」する力を養成することが、「ポスト真実」時代¹にある大学教育において重要な課題であると考えからである。

内容理解の補足学習として、受講学生全員に日本語の新聞を毎日読むことを課した。

3.1 学生と時事問題を語る

いずれも授業は月曜日1, 2限に設定されていたため、毎週、授業の最初の15~20分を使って、「国内外で起こった先週一週間の出来事を振り返る」時間を設けた。当初は時事問題に関心を示さなかった学生も、半期が過ぎる頃には発言回数が徐々に増え、中には興味関心を持った課題についてあらかじめリサーチを進め、自分の考えを整理してから授業に臨む学生もいた。学生たちの関心事は、国内であれば日本の政治全般について(学生の多くは「すべてがよくわからない。でも気になる」と語った)、世界情勢に関しては、北朝鮮問題と南北首脳会談(2018年4月28日「パンムンジヨム宣言」)に象徴される南北統一問題であった。

この課題を英語でリスニングするために、2週間に一度のペースでBBC

News Clips (3~4分) を扱った²。その際、日英による用語の整理が重要である³。例えば、「南北首脳会談」は“Inter-Korean Summit”と訳されることに對し、学生たちは“South-North Summit”と直訳する傾向にあった。そこで、“Inter-Korean Summit”と呼ばれるその理由を、単語に注意を払いながら考察するように伝え、と、“Inter”を理解し「コリアン同士で行われるサミットだから」と答えた。さらに、「では、なぜコリアン同士が首脳会談を行うのか」と問うと、しばらく沈黙が続いた後、一人の学生が「朝鮮戦争があったから」と返答した。「では、朝鮮戦争はどんな戦争だったのか」の質問に對し、回答できた学生はいなかった。そこで、本学のMLC (メディア・ラーニング・センター; 国内の大学でも屈指のDVD所蔵数を誇る施設) を紹介し、朝鮮戦争の歴史に触れたいくつかの映画を紹介し、授業外学習を促した⁴。また、実際に起った歴史を知るために、日英による補足資料も配布した⁵。

3.2 国連総会一般討論をリスニングする

また2期は9月中旬から始まるため、毎年ニューヨークで開催される国連総会の時期と重なる。そのタイミングを利用し、各国代表による一般討論演説の内容の一部をリスニング教材とした。むろん、大学1年生を対象とした英語リスニング教材としてそのハードルは高いが、時事問題に触れる習慣を徐々に身に着け始めた学生たちの、各国代表者の発言に對する関心は非常に高かった。

周知のとおり、国連総会は毎年9月下旬にニューヨーク国連本部で開催され、国連加盟国193カ国の内、およそ120カ国の大統領、首相らが集い、総会で演説をし、国際会議に出席する。このような国連にまつわる基礎知識をまずは学習し、その後、各国代表による一般討論の日程を学生たちに伝え、リスニングしたいと希望する国の演説スケジュールを各自確認するように伝えた。一般討論の演説順の決定について取り上げるだけでも興味深く、学生たちは熱心に聞き入る⁶。例えば、最初の登壇国は必ずブラジルと決まっていること、その次にホスト国である米国というのが慣例である。

授業で取りあげた演説内容は学生たちの関心に沿って、日本、米国、そし

て韓国の代表者による3つに絞った。各スピーチは非常に長いため、英・日に翻訳された全訳を配布し、印象に残ったフレーズ、またはパラグラフに下線を引き、その箇所を自分なりに訳し、それに対し国際社会の文脈の中で自分はどうか考えるのかを問う課題を出した。さらに、自分がある国の代表者であることを想定し、どのような演説であれば他国と健全な外交関係を結べると考えるか、という質問も投げた。学生の多くは、歴史を正しく理解し、相手を敬う言葉の選択と姿勢が重要であると述べた。

2017年、2018年度も、上記3カ国代表による一般討論演説を課題にし、いずれの年も多くの学生たちがコメントした印象に残った演説は、韓国の文在寅大統領による南北統一を願うスピーチであった⁷。

3.3 「学生通訳コンテスト」をリスニングする

時事問題を通してリスニング力を養うもう一つの実践的な教材として、毎年本学で開催されている「学生通訳コンテスト」が挙げられる。コンテスト出場者としてだけでなく、当日会場に足を運び、大会のテーマに関する時事問題をリスニングし、それをステージ上で日英、英日に逐次通訳する出場学生の姿を目にするだけでも非常に刺激を受ける経験となる。そのため、特にリスニング授業の受講学生には本コンテストへの積極的な参加を呼びかけている。

「学生通訳コンテスト」は2007年以來、名古屋外国語大学で11月下旬に開催される通訳コンテストで、その時代に注目されている社会問題がメインテーマとなり、そのテーマに関して出場学生数と同じ数のサブトピックが準備される⁸。出場学生は公平を期すために、コンテストの当日に出場順がくじ引きで決定され、自分が通訳をするサブトピックが渡される。審査の対象項目は、通訳における情報の正確性、表現の適切さ、プレゼンテーションである⁹。そのため出場学生は、メインテーマ全般に関して事前に学習することが必要となり、広範囲で深い理解が求められる¹⁰。

出場学生に課されるコンテストの流れは以下のとおりである。

- 1) モデレーター (10秒、英語でトピックの提示) 学生は日本語で逐次通訳
- 2) 日本語スピーカー (30秒スピーチ) 学生は英語で逐次通訳 (持ち時間1分)
- 3) 日本語スピーカー (30秒スピーチ) 学生は英語で逐次通訳 (持ち時間1分)
- 4) 英語スピーカー (30秒スピーチ) 学生は日本語で逐次通訳 (持ち時間1分)
- 5) 英語スピーカー (30秒スピーチ) 学生は日本語で逐次通訳 (持ち時間1分)
- 6) 日本語スピーカー (30秒スピーチ) 学生は英語で逐次通訳 (持ち時間1分)
- 7) 英語スピーカー (30秒スピーチ) 学生は日本語で逐次通訳 (持ち時間1分)
- 8) モデレーター (10秒、英語でトピックのまとめ) 学生は日本語で逐次通訳

コンテスト終了後には、毎年、神田外語大学の柴原智幸氏による同時通訳デモンストレーションが行われる。元BBC放送通訳者であり、現在NHK放送通訳者、映像翻訳者として活躍する柴原氏の通訳デモンストレーションは本コンテストの見どころであり、毎年会場からどよめきの声上がる。

「学生通訳コンテスト」をコーディネートする浅野輝子教授は、通訳に求められるのは「偏見のない共感力と広い視野」であると語り、また「通訳とは、単に起点言語から目標言語への忠実な変換を行うというだけでなく、文化的、社会的文脈を判断し、状況に応じた適切な表現をすることで、初めてその職責を全うする」と述べている¹¹⁾。

4. 学生アンケートより

今回、2018年度Listening Comprehensionを受講した2クラスの学生にアンケートを取り (回収率: 月1-31名、月2-31名、計62名)、リスニング学習に関して気付いたこと、または学習して効果的だと思ったことについて自由記述で回答してもらった。以下はその内容であり、学生の多くが授業内で扱った時事問題について述べた。

【1】〈リスニングの基礎学習について〉 (▶学生コメント)

- 1) 小テスト (ディクテーション)・反復学習の効果 (42名)

▶3人称や複数形の場合の“s”や冠詞の“a”、“the”の違い、過去形や受け身の場合の“ed”を正しく聞き取るのが難しかったが、小テストのおかげで少しずつ聞き取れるようになった。

▶リスニングの反復を続けることで自信が付き、TOEFLのリスニングに対する嫌悪感が減った。

▶リスニングを早めたりポーズを短くしたり自分に負荷をかけることで、絶対に聞き逃さない、一つでも多く聞き取るといった今までにない姿勢でリスニング問題に取り組むことができた。

2) TOEFL、TOEICのリスニングが伸びた (9名)

3) 連語の学習が役立った (9名)

4) 発音記号の重要性を学んだ (3名)

[2] 〈時事問題について〉 (▶学生コメント)

1) 時事問題・国際情勢に興味を持った (24名)

▶今まで単に外国語を習得することに関心があったが、今は現代国際学部学生として世界で起きていることにもっと目を向けて勉強しなければいけないと思った。

▶リスニングを通して、世界の国の文化に触れて、現在の国際情勢や時事問題、教養、芸術など、幅広い知識を得られると思った。耳に入ってくる情報を自分でもっと調べ、知識を増やし、判断して自分の意見を持つことの重要性を学んだ。知識を増やすための情報の取捨選択の方法や、客観的に物事を見るための広い視野を持つことの重要性を学び、情報社会の中で生きていく意欲が湧いた。

▶NHKのニュースを英語で聞くようになった。

▶日本語ラジオで流れるニュースを集中するようになった。

▶今まで世界で今起きている問題についてあまり知らなかった。今は家で自主的に調べたり、動画を見るようになった。これまで世界で起きていることは自分と関係ない、そして理解できないと判断し関わろうとしてこなかったが、自分の意見を整理することでより教養が身に付き、自分の

生きる力になるだけではなく、これからの社会に貢献していけるのではないかと思った。

▶今まであまり興味がなかった国連のこと、ニュースだけでは理解しきれなかったアメリカ経済のことを知ることができて、自国だけでなくグローバルな視野を持ち、他国に目を向け考えることの重要性、積極的に学ぼうとする姿勢の大切さを学んだ。

▶世界で起こっている出来事を知って知識を増やし、リスニング材料にすることを学んだ。配布された英語の記事を読むためには自分の語彙力では全く足りないと感じた。日々の生活の中で時事問題を日本語で知識として理解しているのであれば、その内容が英語で流れた時にはゼロからのスタートではなくなるのだと分かった。

2) 国連総会演説に興味を持った (21名)

▶今まで国連には興味がなかったが、TVでニュースを見た時にふと思い出し、国連のスピーチを見た。何を言っているか分からなかったが、これからもっとリスニング能力を付けて、各国のスピーチがどのようなものかを知りたいし、そこから感動を味わってみたいと思った。

▶普段の私生活の中で、日本だけではなく世界情勢など正直全く興味がなかった。国連総会など問題外だった。

3) フェイクニュースに関するコメント (21名)

▶自分から情報を探して知識を身に付け判断力をつけたいと思った。

▶フェイクがはびこっている世の中で、真実を見極められる人間になりたいと思った。

4) 政治や歴史に興味を持った (9名)

▶英語を学習しているにもかかわらず、世界のことに無知だと感じた。私の海外の友人は自分の国の政治を語ることができる。もっと多くのことを知らなければいけない。私は韓国の音楽や食べ物は好きだけれど、国のこと、政治のこととなるとよく分からず、勝手な偏見で見ていた。

▶物事の背景、特に歴史を知ることによって学習への意欲が向上したと感じた。

5) 新聞を読むようになった (7名)

- ▶図書館に通う習慣がついた。
- ▶今まで新聞を読んでこなかったが、その習慣がつくと話のネタになり、また文章を読む力、書く力が鍛えられた気がする。
- ▶新聞を読む習慣がつき、家でもニュースを見て聞いて、それに対して自分で考えを書くようになった。

6) 教養が大切だと思った (4名)

- ▶聞くにはまず、その用語を知っていないと聞き取れないということが身に染みて分かった。逆に知っている用語はすぐに聞き取れることも分かった。

[3] 〈学生通訳コンテストについて〉 (▶学生コメント)

1) 参加して勉強になった (4名)

- ▶このようなコンテストが学内にあることを全く知らなかった。リスニング力や教養に繋がると思うので次回も参加しようと思う。
- ▶通訳することの難しさを学んだ。語彙力、リスニング力が自分にはもっと必要だと感じた。
- ▶日英の同時通訳のデモンストレーションを見て刺激を受けた。

学生たちの半分以上がディクテーションテストとリスニングの反復学習の効果についてポジティブなコメントを残したことは、教科書に沿って進めたリスニング基礎学習の成果と受け止めている。加えて、時事問題を扱ったりリスニング学習に対する学生のコメントを読むと、これまで英語には興味があっても社会全般に対して関心のなかった学生たちも、その出来事、内容を理解し始め身近な課題として受け止められるようになると、学習意欲が増進し、より深い理解を求めて自主的な学習へのアクションへと繋がっていることが分かった。そのモチベーションは、単に英語リスニング力の養成に限らず、現代に学ぶ大学生に必要な批評力、また共感力の育成に繋がるものである。

5. おわりに

2019年度の本学案内によると、現代国際学部教育理念は、「職業観の形成を意識した“キャリア教育”を推進。国際感覚に優れたグローバル人材の育成へ」と設定されている。ここでいうグローバル人材とは、「英語が話せる」という意味だけではなく、高度な英語運用能力に加え、世界情勢や各国の関係性、文化や習慣などの知識を幅広く持ち、「考える力」や「課題を発見し、問題を解決する力」を習得している人材を指している。言い換えると、現代の社会状況、またその背景を正しく見極め、「世界共通語としての英語」を基盤に、職業分野に直結する能力を持った人材を育成する「キャリア教育」を推進するというのが現代国際学部のカリキュラムを成す根幹となる。

Listening Comprehensionは本学の全学共通英語基幹プログラムであるため英語の基礎力の養成がカリキュラムの柱であるが、時事問題を導入しながら「考える力」「課題を発見する力」「問題を解決する力」の育成を意識したリスニング学習はポスト真実時代にある現代の大学英語教育に非常に重要であり、また学生の学習意欲の向上に大いに貢献すると考える。実際、アンケート結果にもあるように、時事問題に興味を持つようになった学生のリスニング力は著しく伸びている。

注

¹ 「ポスト真実 (post-truth)」: 2016年の「今年という言葉」としてオックスフォード英語辞書が選んだ用語。同辞書はこの用語を次のように定義: 「世論を形成する際に、客観的な事実よりも、むしろ感情は個人的信条へのアピールの方がより影響力があるような状況」について言及したり表したりする形容詞。[津田、日比 2017: 14]

² “Korea: A day of historic talks (BBC News) April 27th, 2018” (3:08), “Peace on the Korean Peninsula? (BBC News)” September 20th, 2018 (2:55), etc.

³ 南北統一問題のリスニングで学習した用語: “Inter-Korean Summit”, “The Korean Peninsula”, “historic meeting”, “pave the way for”, “nuclear weapons”, “hail the talk”, “commitment to denuclearization”, “The Korean War (1950–1953)”, “The Military Demarcation Line”, “nuclear arsenal”, “unfortunate history”, “joint statement”, “hostile activities”, “a reunion of families”, etc.

⁴ 『トンマッコルへようこそ』(パク・クァンヒョン監督、韓国、2005年)、『ハナ―奇跡の46日間』(ムン・ヒョンソン監督、韓国、2012年)、『ディア・ピョンヤン』(梁英姫監督、

- 日本・韓国、2006年）を紹介した。興味関心を持った学生はMLCで作品を鑑賞し、そこから感銘を受け、感想文を自主的に提出した学生もいた。
- ⁵ 実際の歴史を検証する史料として、ノーム・チョムスキー、ピーター・R. ミッチェル、ジョンショフル著『現代世界に起こったこと—ノーム・チョムスキーとの対話1989-1999』（日経BP社、2008年）を学生に配布した。本書は朝鮮戦争にまつわる史実について、一般に知られる「朝鮮戦争」と呼ぶ戦争は、現実にはもっと長期にわたる紛争の一段階に過ぎなかったと説明している〔核拡散防止と北朝鮮〕p.495-497〕。
- ⁶ 国連が6月からコンピューターで各国から申請を受け付け、秒単位で仮の順が決まる。演説言語は6公用言語（英語、フランス語、スペイン語、中国語、アラビア語）が基本（アラビア語は1973年から追加）。演説は一人15分以内の規定であるが、ほとんどの首脳はこれを超過する。過去において最も長い演説をしたのは、1960年にキューバのカストロ国家評議会議長（4時間半）。
- ⁷ 文在寅大統領による演説内容（特に2017年9月21日の演説内容）に関して、多くの学生がコメントを残した。（下線部分は実際に多くの学生が印象に残った箇所として示したもの）。
- 1) “Among other things, it is truly meaningful that the theme of this session of the U.N. General Assembly ‘Focusing on People’ is in line with the philosophy of governance of the new Administration in the Republic of Korea. ‘People come first’ is the slogan I have used for several years to express my political philosophy. And the ‘people are at the center of all policies of my new Administration.’”
- 2) “Please imagine for a moment: People from all around the world who love peace and sports will be gathered in Pheong Chang, which only 100 kilometers away from the Demilitarized Zone, the symbol of division and confrontation on the Korean Peninsula. Heads of states and governments from all corners of the world will exchange greetings of friendship and harmony. My heart is filled with great joy when I imagine North Korean athletes marching into the stadium during the opening ceremony, a South-North Korean joint cheering squad enthusiastically welcoming them alongside the brightly smiling faces of people from all over the world. It is not an impossible dream. To turn this into a reality, I will make wholehearted endeavors until the end of in cooperation with the IOC in order to welcome the North Koreans to the PyeongChang Winter Olympics.”
- ⁸ これまでのコンテストのテーマ：第1回大会（2007年）「環境問題」、第2回大会（2008年）「多文化主義」、第3回大会（2009年）「日本と英国の司法制度」、第4回大会（2010年）「日本と英国におけるビジネスの世界」、第5回大会（2011年）「文化と医療」、第6回大会（2012年）「日本と英国の歴史と文化」、第7回大会（2013年）「健康・医療及び技術」、第8回大会（2014年）「こどもの発達に伴なう心理社会的問題」、第9回大会（2015年）「グローバル社会における移民問題」、第10回大会（2016年）「グローバル時代における若者の政治参加」、第11回大会（2017年）「孤島の国は存在しない—世界、日本、双方が互いに与え合うもの」、第12回大会（2018年）「AIと人間社会に与えるその影響」
- ⁹ これまでのコンテストの参加校は東京外国語大学を始め、大阪大学、神戸市外国語大学、神戸女学院大学、津田塾大学、上智大学、青山学院大学、立教大学、大阪女学院大学、神

田外語大学、大東文化大学、京都外国語大学、長崎外国語大学、関西外国語大学、成城大学、獨協大学、高崎経済大学、明海大学、また地元からは名古屋市立大学、南山大学、金城学院大学、愛知学院大学である。また審査員は、日本の通訳界で著名な原不二子氏（第1回大会～11回大会、審査員長）、関沢紘一氏、柴田真一氏、船山仲他氏（第12回大会より審査員長）が務めている。

¹⁰ 過去の大会スクリプト（3年分：第9回大会、第10回大会、第11年大会）は『世界のトピックで学ぶ 通訳ワークブック』（2019）を参照。出場学生が事前学習できる各サブトピックに関連するキーワードも確認できる。

¹¹ [浅野、2010：219]

参考文献

- 浅野輝子，2010「通訳教育における通訳コンテストの意義とその効果についての検証」『名古屋外国語大学現代国際学部紀要』第6号。
- 浅野輝子，吉見かおる，2019「世界のトピックで学ぶ 通訳ワークブック」名古屋外国語大学出版会。
- 津田大介，日比嘉高，2017『『ポスト真実』の時代』祥伝社。
- ノーム・チョムスキー，ピーター・R. ミッチェル，ジョンシヨフル，2008「現代世界で起こったこと—ノーム・チョムスキーとの対話 1989-1999」日経BP社。
- Yoneyama, Asuka., & Lindsay Wells (2017). *Listening Steps*. Tokyo: Kinseido.